HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	エコツーリズムから考える自律的で持続可能な地域
Author(s)	敷田, 麻実
Citation	平成20年度北海道大学公開講座持続可能な社会と北海道発見 : 地球環境と私たちのくらし. pp.9-13.
Issue Date	2008-07-07
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/34611
Type	other
Note	平成20年度北海道大学公開講座　持続可能な社会と北海道発見ー地球環境と私たちのくらしー．平成20年7月3日～平成20年7月31日．札幌市
File Information	47-A3.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第２回

エコツーリズムから考える自律的で持続可能な地域

敷　田　麻　実

敷　田　麻　実（しきだ　あさみ）北海道大学教授（観光学高等研究センター）
昭和58年高知大学農学部栽培漁業学科卒業後、石川県水産課に勤務。その間豪州ジェイムスクック大学大学院、金沢大学大学院社会環境科学研究科博士課程を修了。平成10年金沢工業大学環境システム工学科助教授、平成14年から同教授、平成16年から同大学情報フロンティア学部情報マネジメント学科教授。平成19年より現職。野生生物保護学会会長。専門はエコツーリズムと地域マネジメント。

[講義概要]

エコツアーは自然環境を保全しながら学び、楽しむ旅行とだ言われ、年々観光客の人気が高まっている。地域の自然環境を利用して魅力的な観光を推進することは、自然環境が豊かな北海道には有利である。そのため道内各地でエコツーリズムの推進がテーマになっている。そこでこの講義では、エコツーリズムを推進することで地域は豊かになれるのか、この新しい観光を地域はどのように扱えばいいのかを考える。

[内　　容]

この４月１日に「エコツーリズム推進法」が施行された。90年代後半から次第に国内でも普及してきた「エコツーリズム」は、推進法の施行で一層の普及が進むだろう。エコツーリズムでの本格的な「エコツアー」だけではなく、ごく普通の観光でもオプショナルツアーでの自然体験プログラムが増えている。地域の自然を保全しながら楽しむという新しいスタイルの観光が持つ魅力が人気を呼んでいる（図１）。

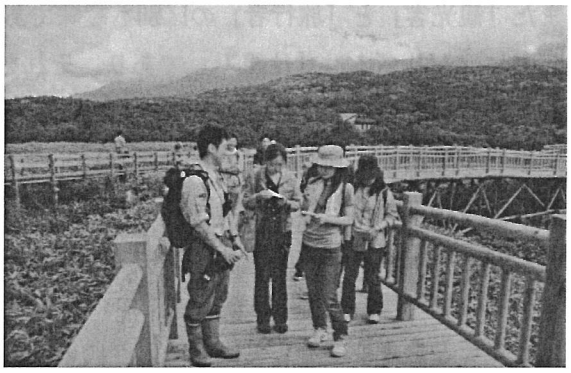

図１　観光現場でも一般的になったエコツーリズム（北海道・知床国立公園）

同時に、地域づくりや地域再生にかかわる関係者も、エコツーリズムに大いに魅力を感じている。地域にある自然環境資源で観光客を呼び、地域の環境保全も同時に実現するというエコツーリズムは、地域の関係者が「良い観光」だと考え、「地域づくりに使える」と思っている。そこには、単にエコツアーの実施だけではなく、地域づくりや地域再生、さらには地域における持続可能な観光への動きがある。

しかし、エコツーリズムにかけられる期待の大きさに比較して、エコツーリズムでいったい何ができるのか、どのように進めれば良いのかという、地域で実践する場合の重要課題が明確ではない。そのため、エコツーリズムの実践現場では、エコツアーという「旅行商品」づくりだけが目標になり、エコツーリズムが目指すものがぼやけていることが多い。

そこで、エコツーリズムという、環境保全・観光振興・地域振興のバランスがとれた観光を地域再生などに活用するために、エコツーリズムを推進する地域が、エコツーリズムにどう取り組めばいいのかを講義の中で考えたい。

1．エコツアー、エコツーリズムとは何か

エコツアーとは「自然環境への負荷を最小限にしながらそれを体験・学習し、目的地である地域に対して何らかの利益や貢献のある旅行あるいは旅行商品」である。ただし国内では、旅行商品ではないオプショナルツアーや、自然学校で提供される「プログラム」と呼ばれている活動もエコツアーに含まれる。というのは、旅行商品ではないエコツアーが実際には多いからだ。それに対してエコツーリズムは、「旅行商品であるエコツアーをつくるという考え方と、それを生み出す仕組み」である。エコツーリズムは、旅行や旅行商品ではなく、観光を提供する側がかかわることである。つまり、観光客（旅行者）が参加しているのはエコツアーで、エコツーリズムはエコツアーを含む、それをつくり出す考え方と仕組みを指す。

図２　エコツアーガイドの解説

ただしエコツーリズムのツーリズムは日本語の「観光」とは差がある。それは、ツーリズムとツアーにそれぞれ該当する日本語の「観光」と「旅行」が、明確に区別して使われていないからだ。例えば、ふだんの生活の中では「日帰り観光」や「観光旅行」という言葉を使う。観光と旅行は区別しにくく、また「観光客」と「旅行者」の区別も曖昧である。

エコツーリズムは「仕組み」であり、それを動かす関係者が必要だ。それは旅行業者、運送業者、飲食業者、宿泊業者などいわゆる観光関係者である。それに加え、エコツーリズムでは、ガイドや自然環境の専門家も含めなければならない。今までの観光と異なり、環境保全の知識を必要としたり、環境について解説する専門的なガイド（図２）が必要だ。

このような関係者の広がりはエコツーリズムの持つ特徴の１つであり、それがそのまま利点である。今までの観光は、観光関係者だけでつくられることが多かったので、地域の人々とはあまり関係なく、地域のことをよく理解していない人々によって観光が進められ、結果的に地域に悪影響、いわゆる「観光公害」も生じてきた。

しかしエコツーリズムは、観光関係者に独占されてきた「観光」に地域が参加するチャンスである。なぜなら、地域の自然環境が観光資源になるエコツアーでは、それをよく知っている地域関係者がいないと優れた旅行商品がつくれないからである。

ところで、エコツーリズムの対象は自然環境だけではない。地域の民俗や伝統、景観などの文化資源も対象となる。特に二次的自然が多く、人と自然のかかわりが社会の重要な要素である国内では、エコツーリズムの対象は「自然環境と人とのかかわり」と捉えておきたい。

２．環境保全と観光振興が融合したエコツーリズム

世界的にはエコツーリズムの普及は1980年代後半である。その誕生の背景には、「環境保全と旅行業界のニーズの一致」があったと言われている。環境保全側は保全資金を得たいと考え、また観光産業側は観光資源としての自然環境を活用した新商品開発を目論んでいた。

その後、1990年代前半には、リオ会議で提案された「サステイナブルデベロップメント（持続可能な開発）」の影響を受けて旅行業界も「グリーン化」を進めなければならなくなり、エコツーリズムは一層注目された。一方、環境保全側も、地域主体で観光を進めなければ持続可能な観光にはならないので、その実例としてエコツーリズムを推進しはじめた。

国内でもほぼ同じような動きをたどるが、日本のエコツーリズムの特徴は、地域とのかかわりが大きいことである。地域づくりや地域再生のためのエコツーリズムに期待がかけられてきた。

３．エコツーリズムは理念を持つ観光

エコツーリズムは、自然環境を保全しながら観光資源として利用する観光である。観光関連企業の利益が目的だった「今までの観光」とは違い、地域振興と観光振興を進めながら、環境保全も同時に目指す理念をエコツーリズムは持っている。エコツーリズムは、観光現場で地域の社会や環境に与える影響を最小限にする努力（環境保全）をしながら、観光産業の発展（観光振興）を図り、その上、観光地も豊かにする（地域振興）という「欲張りな」観光である。環境保全と観光振興、そして地域振興で示される三角形のバランスを図３のように保ちつつ進める観光である。ただし、必ずしもそれが正三角形になる必要はない。エコツーリズムの理念は「バランスをとること」であり、それはエコツーリズムを推進する地域ごとに決められて良いはずである。

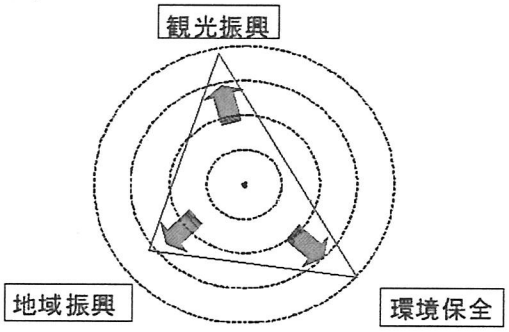

図３　エコツーリズムの理念

また、今までの観光と大きく違う点は、地域の視点である。エコツーリズムには、今までの観光では無視されがちであった地域の利益を優先するという理念が含まれている。そのためにエコツーリズムでは、地域の自然環境や文化遺産を地域自らが評価し、地域側でエコツアーという「完成品」をつくることを目指す。しかし今までの観光、一般的には「マスツーリズム」と呼ばれている観光では、地域外の観光関係者がツアーをデザイン（企画）し、地域は「部品」である地域の自然環境などをそれに提供することが多かった。

４．地域とエコツーリズム

地域でエコツーリズムを推進する際に重要なのは、観光関係者に加えて、自然環境の専門家やガイド、地域の自然環境に関係する住民などの「協働の仕組み」づくりである。なぜ協働が必要かというと、エコツーリズムでは、今までの観光にはないプロセスが増えるからだ。

具体的には、地域の自然環境を評価し、観光資源化するプロセスと、一方的に観光で利用するだけでは疲弊してしまう地域の自然環境を、積極的に保全するプロセスが加わる。この２つのプロセスが、今までの観光のプロセス、旅行商品をつくって観光客を招くというプロセスと融合することでエコツーリズムがつくり出せる。

このプロセスがそろって地域でエコツーリズムを推進できるが、多様な関係者が参加するこのプロセスをうまく進めるには、やはり関係者の協働が必要になるだろう。

以上のプロセスとエコツーリズムの関係を図４に整理した。エコツーリズムでは、下側の矢印に示すように、地域の自然環境を評価して資源化し、エコツアーとして商品化するという「地域外に向けた働きかけ」がある。また上側の矢印のように、エコツーリストを地域外から集め、そこから得た収入を地域の環境保全に投資する「地域内に向けた働きかけ」もエコツーリズムの役割である。

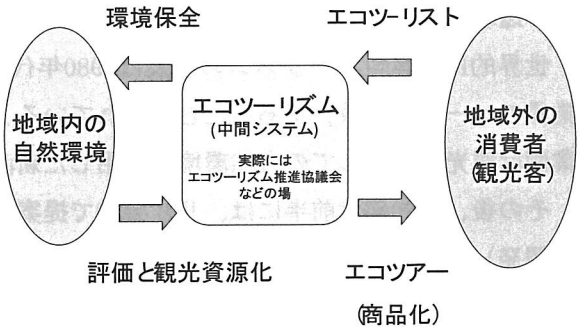

図４　エコツーリズムのプロセス

このプロセスによって、地域の自然環境も維持でき、一層その価値が向上し、より魅力的なエコツアーが実施できるようになる。そして、地域の「ローカルルール」を作成したり、協議したりしながらこのプロセスを進める「中間システム」がエコツーリズムである。またこの図では描いていないが、エコツーリストが来訪すれば、地域経済への刺激となる消費が生ずる。その点からは、地域内の活動が活性化し、地域経済も豊かになるという、エコツーリズムの地域づくりや地域再生効果が期待できる。

５．エコツーリズムの真の効果

エコツーリズムが自然環境保全に寄与することや、地域づくりに活用できることは、多くの関係者が期待している。もちろん理念を明確にして、着実に推進すれば、その効果は発揮されるだろう。しかし、エコツーリズムにはほかにも利点がある。

中でも特に期待できるのは、今まで地域内で関係したことがなかった人々が、エコツーリズムを通して協働し、お互いのネットワークが強化されることだ。地域コミュニティの再生や地域内での協働が再評価されている現在、エコツーリズムを利用してそれを促進できる魅力は大きい。またエコツーリズム導入のための「ローカルルール」づくりで話し合いの機会をつくることができる。自然環境の適切な利用のためには、ルールづくりがかかせないからだ。

さらに地域に住む個人にとっても、エコツアーのガイドなどで雇用機会が増やせる。それも、自然環境について学んでそれを説明するという「創意工夫の学習機会」であり、個人の能力をアップする「エンパワーメント」のチャンスとなるだろう。また自然解説などで地域のことを学び直すことで、日常生活に埋没していた地域の素晴らしさを再確認し、そこから地域の人々が「郷土の誇り」を再確認できる優れた効果もある。

６．エコツーリズムのマネジメント

エコツーリズムの推進は、地域にとって今までの「観光振興」以上の素晴らしい効果を期待できる。しかしエコツーリズムの推進の結果、多くのエコツーリストが訪れると、さまざまな問題が起こる。

例えば、知床半島のように、エコツアーサイトとして知名度が上がった地域では、エコツーリスト以外の一般観光客も多く来訪するようになり、自然環境への影響が拡大している。野生生物への給餌は問題外だが、エコツーリストの満足のために、対象生物への接近による生態系の変化が起きがちで

ある（図５）。また、直接的な影響のほかにも、エコツーリズム振興のための施設整備やミニ観光開発によって、保全すべき自然環境にまで手をつけてしまうことも危惧される。

さらに都市部に住むエコツーリストは地域で生活していないので、「純朴」な自然保護思想を押しつけがちである。自然環境は保護しないといけないとばかりに、狩猟などの地域の伝統的な利用が批判されてしまうことも予想できる。こうしたエコツーリズムの影響を考える時、「エコツーリズムは環境にやさしく、地域のためになる」という思いだけでは不十分である。

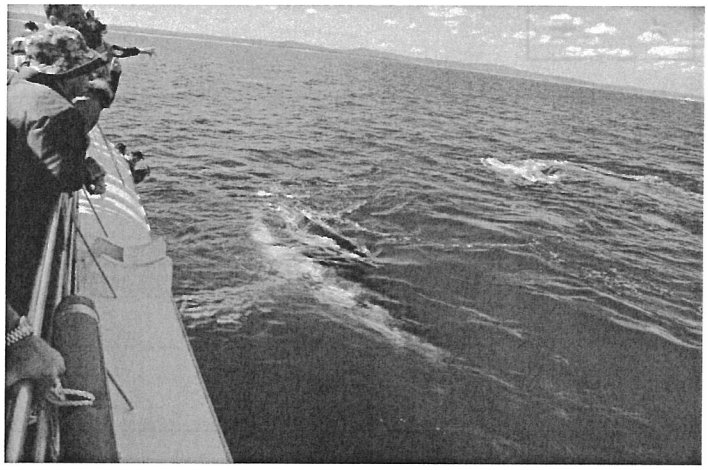

図５　ホエールウオッチングでの観光船とクジラの接近
（オーストラリアフレーザー島沖）

そこで提案したいのは、地域による「自律的なエコツーリズムマネジメント」である。それは、エコツーリズムの持つマイナスの影響とプラスの効果を考慮した上で、地域にとってメリットがある結果にする試みである。そのためにはエコツーリズムの実現という達成目標ではなく、その実現プロセスをしっかり「マネジメント」することが肝要だろう。その際の新たな目標とは、サステイナブル（持続可能）な観光の実現であり、さらにはサステイナブルな地域のための観光の実現である。

７．これからのエコツーリズムと地域

現在地域では、エコツーリズムが地域づくりの「万能薬」のように語られることも多い。確かにデメリットを差し引いても、エコツーリズムの持つ魅力は輝いて見える。しかしエコツーリズムは、地域が方針を持って上手に使わなければメリットを生み出せない仕組みであり、その点では「不透明な選択肢」にすぎない。その解決のためには、地域自らが主体的にエコツーリズムとかかわり、エコツーリズムを推進することが必要である。

それは最近主張されている「自律的な観光」と軌を一にする。地域が地域の観光の全体像をデザインし、それに従って地域外の観光客や旅行業者との関係を築くことが自律的な観光である。もちろん、地域だけで観光が成り立つはずもなく、旅行代理店や旅行会社という「観光システム」との連携なくしては立ちゆかない。しかし、こうした地域外の大きな観光システムとの関係を、自分たちでうまくマネジメントさえすれば、今までの観光のように、地域が一方的に影響を押しつけられることは防げるだろう。

また地域自ら観光をマネジメントするというプロセスは、地域が自律的に考えて地域を豊かにしてゆくという優れた地域づくりへのステップとなるだろう。この点では、エコツーリズムは地域内の多様な関係者との連携や協働を基本とし、また住民による地域資源の見直しがプロセスに組み込まれている「優れた選択肢」である。エコツーリズム推進法の施行で一層認知され、身近になってきたエコツーリズムを、単に新たな旅行商品の企画で終わらせずに、自律的で持続可能な地域の実現のための仕組みづくりとして捉えてはどうだろうか。